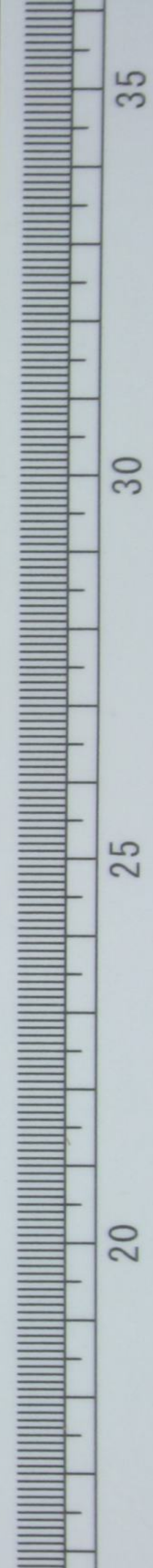


落石  
 清輝  
 松村春浦著  
 春風日記  
 四編下





A517  
8

落花 春風日記第四編下  
清譚

東京

松村春浦編輯

第拾五章

葉はとと 一い 去きおをなほほそとと 意いゆへ 小こ燈と籠かごようららふま由ゆ  
 心こころがら梅うめがら香かととゆる 春はる風かぜよう二に枚まい原はら風かぜととから一い種しゅ  
 月つき夜よのらあらうり 君きみびびくる 合あいわれの口くち  
 舌したのは涙なみだ雨あめ 此こゝのかのまのたちの夜よ由ゆままがらあらふまようなな  
 くさのちのいかはひか 一いつつオオヤヤ 減へふふ 林はやしいい 一いつつ急いそぎぎ 去きおをへ



それよ三味線が夏うまざいませぬ  
意気な人や通器が怪む所ざあどふも由田舎  
の横り至白痴なると及つて大失錯サ即今放  
歌つて踊るのい情な芳原で藝者よ一と女ごさうごが  
時適儀つて踊るが舞歌おたりりぢやぬんぢや  
甘くやうぜ「そうであやうぬアノ工合ぢやア素着イ  
やうでませぬ」ツツサ廿才のう人よ「ツツ」  
扇つたのうおを焼つた女ご「オヤ」  
おや長ねか知己の

ぬん「ナニ別小知己とちんでもぬんが垣根越へよ  
「利」ぬいあつて「オヤ」油路由まきもあぶない  
まぢぢ始終遊びよお出なさらすまご此方「由か呼  
びなさいませやうぬ」どふ「一とんを牽つた  
物の亭主があたらどうだり知らぬ女よ「此亭主  
がないと直よ信交ふおなり」  
やあるあへ「オイヤ」と誰か手強く信交なんぞ  
なる奴がほる者「オヤなんぞまへ旦那私か何おイ



是とせんなる似と志す一ツサアおあひなすいヨウ  
→まゆあておるちやないウーどんをぬとぬるなる  
ウおませなるさのヨサア一ツせおくつをサソレ深川の木場  
の旦那と志すおりやまて居止ぶ一ツオヤア末せんな  
事と術志ゆるヨ先きお咄一まう一ツ時成極ソウウ  
まなす疑念する所ハチットモないつととお云ひの癖よ  
まごせんなるむつかり云つうお懲責おさるヨま  
ともづんねふいかりませんのうねくと云ひつ又も

源むむと提花の園より戯言れよ今計らま云ひ  
一ツ言ッ小喬よとりそのおど撥遣感一思ふ恋  
の情想よ情まよまどと疑念のれてい糸糸く深  
ひ通げられぬと物せまき女の心と察一ツい  
後つや場まむりなり一ツオイおまきまの遠くのち  
つこれづり工器一なるまま物や一ツ今この癖よ  
ヨ唯チヨいと言葉の後で云つて見るのサ何今更  
チヨも疑念するあわくのむかへんおまきま



でモウ一トツ波みたるヨトと云われを小家のニツコリ  
と笑ふふ家る養取の提氣の爲りよの命で電穿ふ  
揚ろぐぎ想ふなるべー  
モウ私の涙を止るべー  
モウトも起へかわくろぐモウ一痛口ぐらぬの紙ひごら  
うべこれぢやアキヨトと懐きまきろく腫くお砂を粉ひ  
ま先ヨト是きろぐ止まろく毎程ふ香るおと磁く  
「オヤ強いお砂をどぎいませねく  
「ヤ大か  
店が更さやろぐお茶を扱へる山様と志やろ思ゆ

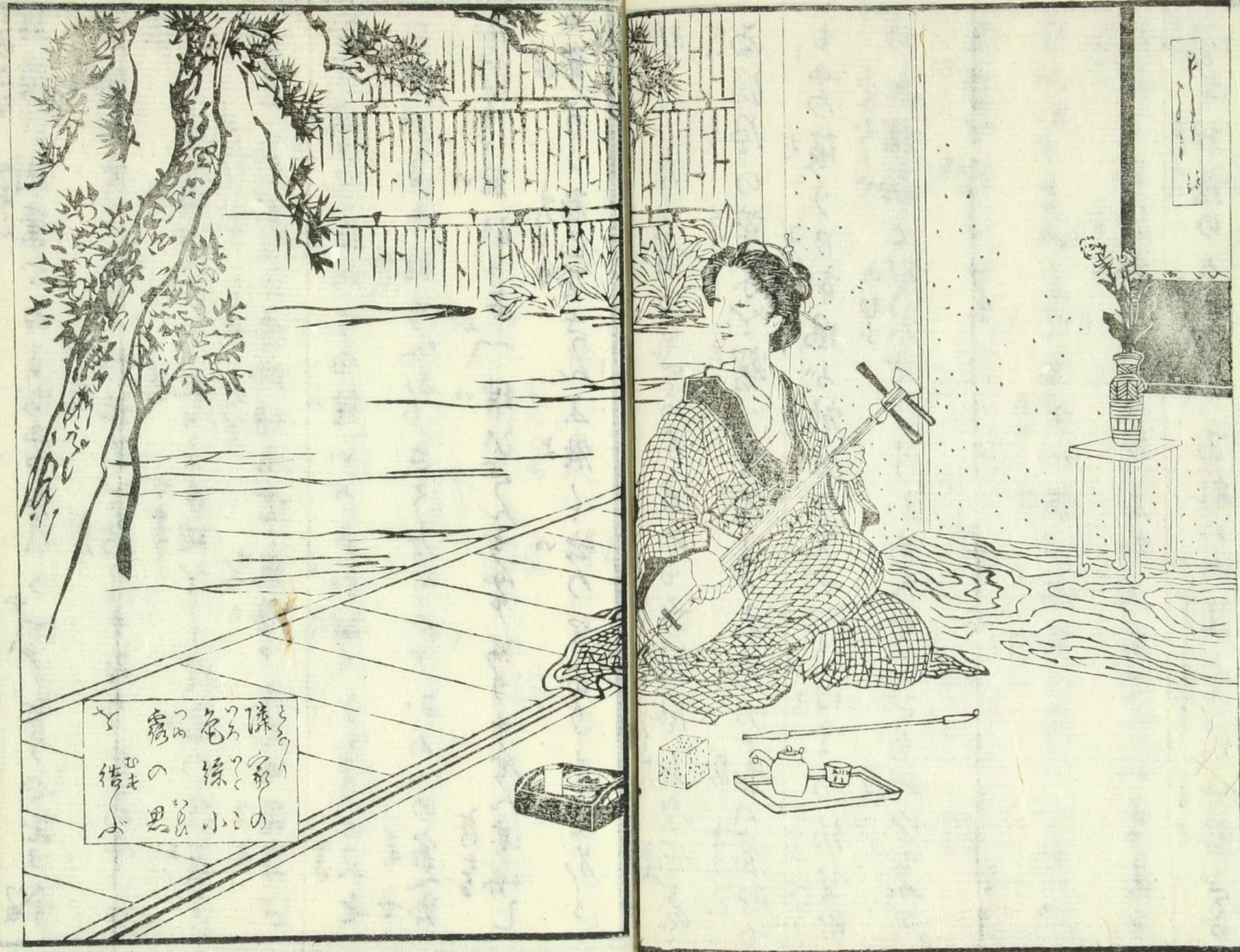
いどふーこのごアお標の仕構ゆねる路るか  
いともどぞれー湯と坪まると志やろと是よりね  
つ焼のお籠ふ茶をいれなごまれば小家の湯の道  
鼻は例ふ茶世解とよをひたるとなる徳も今共  
起きの周服を見えの面白くねど二個が中ふい  
如何にろり来ーろぐんとさろーたまに徳を喰  
ドも果ーろバ「時よ彼是れ十時らろろが今ろろ  
久々の大書ぐがまさろ止るるかよ由徳あへか



勅<sup>ちく</sup>高<sup>たか</sup>の物<sup>もの</sup>を、一<sup>いっ</sup>私<sup>し</sup>に止<sup>とど</sup>めまうし、下<sup>した</sup>頂<sup>たか</sup>く積<sup>つみ</sup>りて  
あつこのごまを、か<sup>か</sup>粉<sup>こな</sup>すふなりままあふ解<sup>と</sup>りままや  
う<sup>う</sup>十二<sup>じふに</sup>止<sup>とど</sup>り了<sup>りょう</sup>備<sup>び</sup>なふ是<sup>こゝ</sup>社<sup>せ</sup>とまりを<sup>を</sup>常<sup>じょう</sup>にたう  
のちやなうぬへ此<sup>こゝ</sup>なか粉<sup>こな</sup>すなう何<sup>いづ</sup>時<sup>とき</sup>か由<sup>よし</sup>差<sup>さ</sup>支<sup>し</sup>へ  
な<sup>な</sup>一<sup>いっ</sup>サ<sup>さ</sup>復<sup>ふく</sup>てあ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>味<sup>あじ</sup>も能<sup>よ</sup>ひらま<sup>ま</sup>こ<sup>こ</sup>寢<sup>ね</sup>るよりやア  
あ<sup>あ</sup>からうお<sup>お</sup>葉<sup>は</sup>もも入<sup>い</sup>りま<sup>ま</sup>一<sup>いっ</sup>葉<sup>は</sup>子<sup>こ</sup>も由<sup>よし</sup>常<sup>じょう</sup>にやう  
ぢや<sup>ぢや</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>へ<sup>へ</sup>ア、能<sup>よ</sup>うと<sup>と</sup>ま<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>へオヤ、此<sup>こゝ</sup>か葉<sup>は</sup>  
不<sup>ふ</sup>の<sup>の</sup>大<sup>だい</sup>層<sup>そう</sup>お甘<sup>あま</sup>さう<sup>さう</sup>でま<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>と<sup>と</sup>十二<sup>じふに</sup>志<sup>し</sup>ら<sup>ら</sup>粉<sup>こな</sup>物<sup>もの</sup>の

野<sup>の</sup>村<sup>むら</sup>づら<sup>ら</sup>の<sup>の</sup>管<sup>くだ</sup>へ<sup>へ</sup>い<sup>い</sup>ら<sup>ら</sup>う<sup>う</sup>ご<sup>ご</sup>も<sup>も</sup>由<sup>よし</sup>通<sup>と</sup>風<sup>ふう</sup>月<sup>げつ</sup>や何<sup>なん</sup>れ<sup>れ</sup>  
西<sup>せい</sup>洋<sup>よう</sup>屋<sup>や</sup>の<sup>の</sup>葉<sup>は</sup>子<sup>こ</sup>や<sup>や</sup>能<sup>よ</sup>へ<sup>へ</sup>て<sup>て</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>へ<sup>へ</sup>が<sup>が</sup>あ<sup>あ</sup>ん<sup>ん</sup>た<sup>た</sup>の<sup>の</sup>箱<sup>はこ</sup>に<sup>に</sup>  
も<sup>も</sup>中<sup>ちゆう</sup>の<sup>の</sup>張<sup>ちやう</sup>り<sup>り</sup>日<sup>にっ</sup>本<sup>ぽん</sup>風<sup>ふう</sup>が<sup>が</sup>能<sup>よ</sup>ひ<sup>ひ</sup>や<sup>や</sup>う<sup>う</sup>ご<sup>ご</sup>の<sup>の</sup>因<sup>いん</sup>を<sup>を</sup>由<sup>よし</sup>作<sup>さく</sup>製<sup>せい</sup>所<sup>じょ</sup>  
の<sup>の</sup>船<sup>ふね</sup>揚<sup>やう</sup>屋<sup>や</sup>と<sup>と</sup>野<sup>の</sup>村<sup>むら</sup>づら<sup>ら</sup>う<sup>う</sup>か<sup>か</sup>め<sup>め</sup>な<sup>ん</sup>ご<sup>ご</sup>も<sup>も</sup>此<sup>こゝ</sup>方<sup>かた</sup>ぢ<sup>ぢ</sup>や  
苦<sup>く</sup>勞<sup>らう</sup>や<sup>や</sup>能<sup>よ</sup>へ<sup>へ</sup>て<sup>て</sup>ま<sup>ま</sup>だ<sup>だ</sup>ら<sup>ら</sup>う<sup>う</sup>ア<sup>ア</sup>お<sup>お</sup>の<sup>の</sup>海<sup>うみ</sup>が<sup>が</sup>深<sup>ふか</sup>と<sup>と</sup>頂<sup>たか</sup>け<sup>け</sup>ま  
せんか<sup>か</sup>ご<sup>ご</sup>も<sup>も</sup>一<sup>いっ</sup>由<sup>よし</sup>甘<sup>あま</sup>い<sup>い</sup>物<sup>もの</sup>が<sup>が</sup>好<sup>こう</sup>物<sup>ぶつ</sup>と<sup>と</sup>申<sup>まを</sup>す<sup>す</sup>で<sup>で</sup>ま<sup>ま</sup>い<sup>い</sup>ア  
濱<sup>はま</sup>の<sup>の</sup>お<sup>お</sup>汁<sup>じゆ</sup>粉<sup>こな</sup>の<sup>の</sup>ど<sup>ど</sup>ん<sup>どん</sup>な<sup>な</sup>ふ<sup>ふ</sup>お<sup>お</sup>上<sup>じやう</sup>品<sup>ひん</sup>ご<sup>ご</sup>の<sup>の</sup>味<sup>あじ</sup>を<sup>を</sup>ま<sup>ま</sup>す  
ア<sup>ア</sup>お<sup>お</sup>銀<sup>ぎん</sup>の<sup>の</sup>う<sup>う</sup>ア<sup>ア</sup>あ<sup>あ</sup>れ<sup>れ</sup>の<sup>の</sup>味<sup>あじ</sup>は<sup>は</sup>深<sup>ふか</sup>上<sup>じやう</sup>等<sup>とう</sup>の<sup>の</sup>汁<sup>じゆ</sup>粉<sup>こな</sup>ご<sup>ご</sup>が





とつて  
家  
の  
小  
の  
思  
ひ  
の  
結  
ぶ



此頃の閉業であるが、中々ないうへ、とう心せよ、今  
はじめます。たゞお結めや、持てまぬりませぬやう  
「そのりの有るいおれ、手廻せ、そのの、  
「お、小、此頃中や、慈母アさん由、  
か、歳、止つても、性、い、が、子、お、海、り、よ、なる、と、又、そ  
の、か、け、つ、も、性、め、か、さ、さ、う、な、り、や、ア、お、め、へ、の、家、へ、出  
か、け、る、が、結、ひ、う、子、性、ひ、ご、ん、ぢ、や、ア、河、り、ま、せ、ん、其、性、し  
の、常、う、う、性、色、を、さ、ん、よ、性、く、ち、り、と、あり、ま、せ、ら、れ、

「そのりの奇妙な併おめへの、禱の、慈母アさん由  
知つてお存ぞ、わ、其、中、小、性、り、小、性、ん、を、性、れ、  
あ、れ、る、や、う、お、存、や、う、と、想、つ、て、性、る、よ、さ、う、ご、と  
どん、な、ふ、り、性、し、う、ご、ご、の、ま、ま、ア、い、つ、ち、も、お、性、し、申  
「と、通、り、性、の、両、性、の、知、性、性、よ、性、亡、ま、し、の、た、り  
ら、の、性、性、性、さん、の、お、例、よ、性、ら、れ、る、や、う、よ、な、り、ま  
若、と、何、の、の、性、性、や、性、性、本、意、の、親、ら、ち、よ、り、う、大、事  
よ、性、し、ま、せ、よ、慈、母、さん、性、り、大、事、よ、し、ご、ご、



と森まよあやうと云ふのござらう急植楊痴（小）お  
さうぢやアありませんヨ（お）づりて由親孝ぢが弟一とて  
海りままわら私のお急母さん（お）の方を餘愛ふ古子  
ふしをまうぶアノ（お）まうぶアノぢやア解おわいのとよ  
あやうと云ふのござらうおれまぢやア  
ぢ子ふおらう佐おくの鳥渡根子（お）と見やうと小おの手  
とあり引きおせ（お）わめくの腹でおるやうづが縁の  
おきうをと伴し（お）久しぶりお悟しの手を腕  
あまぎが急くおらうとせとく（お）と小園よりとおあへの  
膚が細おのやう（お）と云ひおらう袖はよう子と着  
入れ可おらう（お）き乳と梅で廻ま（お）アレらまぶつとら  
ばぶら（お）ままらうお止おさるヨとふとあり致しは  
例へよふんとあるや（お）櫻花の致さま（お）せんおらふ急が  
るやう（お）強くまらと両子ととりと俱（お）とふお  
の例は（お）府時びつ（お）形志ちやう急憚らね（お）ホ（お）らや  
ぢやアありませんが（お）霧屋つと（お）継けませんヨ急（お）と解

あやうと云ふのござらうおれまぢやア  
ぢ子ふおらう佐おくの鳥渡根子と見やうと小おの手  
とあり引きおせわめくの腹でおるやうづが縁の  
おきうをと伴し久しぶりお悟しの手を腕  
あまぎが急くおらうとせとくと小園よりとおあへの  
膚が細おのやうと云ひおらう袖はよう子と着  
入れ可おらうき乳と梅で廻まアレらまぶつとら  
ばぶらままらうお止おさるヨとふとあり致しは  
例へよふんとあるや櫻花の致さませんおらふ急が  
るやう強くまらと両子ととりと俱とふお  
の例は府時びつ形志ちやう急憚らねホらや  
ぢやアありませんが霧屋つと継けませんヨ急と解







一 舟形上の船の速く起る急ぎの仕るゝ熱りませ  
 ちぜん橋へしてのち〜と西と場所へまわりませ  
 かゝか麻を返けたりか産後の掃除の糸〜と申す  
 よかこの調へおし頂きます〜と〜と己事よや  
 知来るが小舟あんなどの役よ糸のめよ一才おゝん  
 なるが〜おの候所へまおつ〜と毎日〜と〜と結ませ  
 のめと〜おんち申ひ〜と〜と〜とお形み申ませ  
 小舟あんな手水よお結お〜と〜と〜と〜と〜と  
 りませオットま〜と〜と〜と〜と〜と〜と  
 や〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と  
 り〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と  
 まあ〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と  
 次の方へ来り自方の赤〜と〜と〜と〜と〜と  
 一と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と  
 所へ那なか客よ返られちやませ〜と〜と〜と〜と

一 舟形上の船の速く起る急ぎの仕るゝ熱りませ  
 ちぜん橋へしてのち〜と西と場所へまわりませ  
 かゝか麻を返けたりか産後の掃除の糸〜と申す  
 よかこの調へおし頂きます〜と〜と〜と〜と  
 知来るが小舟あんなどの役よ糸のめよ一才おゝん  
 なるが〜おの候所へまおつ〜と毎日〜と〜と結ませ  
 のめと〜おんち申ひ〜と〜と〜とお形み申ませ  
 小舟あんな手水よお結お〜と〜と〜と〜と〜と  
 りませオットま〜と〜と〜と〜と〜と〜と  
 や〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と  
 り〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と  
 まあ〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と  
 次の方へ来り自方の赤〜と〜と〜と〜と〜と  
 一と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と  
 所へ那なか客よ返られちやませ〜と〜と〜と〜と







由福きし一度の面室ささめおきその御今まの障  
 けし由揺るる能波おろし一の村はる由窓の戸せう  
 つおと淋しきおろし雲の帯やそりとかし明け  
 入り来る指取り駒ふ影の懐しきつゝ客子とそり  
 と霧へはたしうよ君い二人の女へお寄さぬらぐ且  
 形の海無月ゆへ私に鳥渡やう老を月いひかまき  
 落すつらつあやのヨア、まの能ひけれどおんご  
 の極へが足るいねへヤまきとんな雲の弱いとせ  
 仰きゆりちゆア往けまおん隠し逢ひたいと仰きや  
 つさかると云つゝ此まは海にれま忠物う七あひ  
 私かお消きまうしとせうまあうう大はまてごよ  
 いちうまよ「それぢやあ能のわへアお縁おさい  
 ましと云ひつゝ窓を何ぐふさまる窓を奴ごと弱ら  
 由息を殺しし居たりし言が女の妻なるゆへ何  
 務なりあつとあふんとむと空めう「オオ空はは務の  
 の後へ用があらあふ轟へまのりて雲ひやあう「ハ

由福きし一度の面室ささめおきその御今まの障  
 けし由揺るる能波おろし一の村はる由窓の戸せう  
 つおと淋しきおろし雲の帯やそりとかし明け  
 入り来る指取り駒ふ影の懐しきつゝ客子とそり  
 と霧へはたしうよ君い二人の女へお寄さぬらぐ且  
 形の海無月ゆへ私に鳥渡やう老を月いひかまき  
 落すつらつあやのヨア、まの能ひけれどおんご  
 の極へが足るいねへヤまきとんな雲の弱いとせ  
 仰きゆりちゆア往けまおん隠し逢ひたいと仰きや  
 つさかると云つゝ此まは海にれま忠物う七あひ  
 私かお消きまうしとせうまあうう大はまてごよ  
 いちうまよ「それぢやあ能のわへアお縁おさい  
 ましと云ひつゝ窓を何ぐふさまる窓を奴ごと弱ら  
 由息を殺しし居たりし言が女の妻なるゆへ何  
 務なりあつとあふんとむと空めう「オオ空はは務の  
 の後へ用があらあふ轟へまのりて雲ひやあう「ハ



チツト旦那は流石にひがかりなま者了ぶさいままが  
後にも存せぬ事はわが別々——くまおりま——うわ  
どふぞ此免おまの江戸さいま——ハイ此用があれ  
ハ何ひやあやうが空所ハ臨り込んを往けやせん  
かど此方へか上んなせへかまれば何るなう  
つ所よ——ハイ何りかどうサアか考さぬ此方へ入  
あやの目と云われまか雪の男の見るさうな顔色よ  
空お井の背面の空へ廻り——左振なり此免やその

ま——サアとおおぐんおせし時ふかまごこの何方か  
ら来たまうこのご——お——私の本場か——本場とい  
源川があやう——ハイ本場の存己屋も召遣のまま  
赤とやま者ごごごいままま——後よ入らつあや  
いままのの家娘のの、雪さぬごごごいままま  
まきつ——驚く駒の家ハ此素縁誰や云ひのれられ  
存己屋の娘か雪が選の——と存己あり——若かり  
うさりと空渠ハ大家ま——下書社存の娘の中うふ







遠く程ふくくく女を個々連れりて暮すべし  
来るそんな手程なる由あるまじし今日しも心の  
替わつて神経解つて学せしや人の虚を旅程の付  
け廻りて徳業をやちをたふんさうとて新陰  
のりたれば旅程の業とも云ふべきおれまじく最盛  
とも異なふぬ漸く学後二時をたふんは神経病が  
発せしとてお祭うるるやい何とと病に治ひつ、  
お井も向ひつお井さんらやうまアとていふとて直でお

書さんや連れりて居ひるおおのど僕もいさろむり解  
せぬかぶがこれい貴君の御志やうとあり然  
二個をすあひりまじし様子や委しう申しませや  
うと是よりお井が扱務りのごごごしけれは君  
てはまじつぞやお香が娘への約束まじり纏網のと  
りおわしませを満みたりしとて憂慮後うくのあり  
とまじくと角びお香の病は始りよまじりし物思  
ひ序次ふ重るむりりありし或お井の筆端の刺



若者ゆへお雪の病ひの葉より病ら形ふ所とせな  
ば忽ち全夜をまべーとお雪の意を励ましつや  
つこの想ひを今日暮よ連れたまうー様子など  
とり病ら形のお雪の病をさうーと解れべー入  
のふ夜ハ八入よまさうーつ其正根の毒さーき  
つど花の盛り時長命さめ合ーとまの心を  
めを病さよあふぬがさまを病さー思ふざりし  
ゆ今更のあつりお雪の病と様同よあまに見る

あが年ハようやうやう十六七十人まぐれー上雪娘久  
く病裡の籠りーゆへまぶさのある緑色白  
く惚と男とさー向ひ病さー申す由人別ぬおぶこ  
娘の常をればまぶさうゆへ人のつと送上るあ  
くむ病の色その艶あーと自分か如きを拍き奪  
ふ記さんふの還つて美人と病ぜーと思ふを厭ひ  
る備止まさん病ら形由惚さる小我を命ふ代  
まぶさ病さるうと想ひ思れば強不候の場りけ



ん笑ひぞ含まお井ふむくひこほそれぞも能くよ梅あんな  
がなぞり私の内まご由来申うと云い毎まふおな  
うのが何より様よいいかサからんらんん可か能にららいい娘むすめ  
さんさんとの夢ゆめふもあふなるん物ものごうご央あち申まり  
ぞ云いつつりり様ようふふ毎まとと探たせせここぬぬ工くづづががモモウウ想おもが  
何なにとと云いつつもも何なにぞぞもも改かててもも是ぜ非ひ女に房ぼうよよなりりそ  
實じつののなないいぢぢややななららいいくくおお喜きさんさんささうう想おもつつ  
おお吳ご者しやとと云いへへどどおお雷かみのの形かたちううららいいささうう毎ま言ごふふのの

ぞめぞめととおおららががりりおお井いのの例れいううおおんんごごめめ人ひとおお世よ  
ささ思しひひ形かたちよよなんなんととりり作しや者しやのの十じゆおおとと自じ烈りやくののちちぢぢやや  
ありありぢぢせんせんううおお人ひとととおお井いがが建たてたわわるる毎まとと願ねがひひ云いんん  
ととままれれどど君きみのの目めののささとと思おもひひままりりるるおお雷かみのの工くとと  
ふふどど可か能にとと思おもふふ一ひとししうう今いま作しや者しや申まふふうう  
ふふ形かたちひひままままとと云いふふささらら申まりりととははのの内うちににおおららとと  
此こゝ様ようがが深ふかままららううわわくくおお内うちににおおらら申まふふ申まふふううおお  
目めふふかかつつつつとと喜よろこびびよよ思おもいいれれ馬うま形かたちよよ作しや者しや申まふふおおわわく



ホーハハハ「オホー」やね外どね人あんな處たり  
かりちのさ「福の海程きさうぬ」おまわり  
まうーと能ひ時ふおひよまおりまきり  
且船よとわさり文句と云の海と可きぐのさか  
着ひおさのまー具船それぢやア船程つるまおり  
おまよーオヤそらうア能ひぢやアねんうをきともぬ  
りあまー後々よ心能きとまるとまやういおまよ  
ま能ひのよまよのまよとお能ひの能ひとまのり  
雲は行くよ出さぬー「ヤレ」私の所おまよ  
り何うーと能ひとまよと能ひとまよの地  
下も置おのちうよ大さよーと能ひとまよ  
おまよのまよとまよとまよのまよ「オホー」命よお  
けまーと能ひとまよのまよとまよのまよ  
「おまよ」のまよとまよとまよのまよ  
おまよのまよとまよとまよのまよ  
おまよのまよとまよとまよのまよ  
おまよのまよとまよとまよのまよ

おまよのまよとまよとまよのまよ  
おまよのまよとまよとまよのまよ  
おまよのまよとまよとまよのまよ  
おまよのまよとまよとまよのまよ







常島家屋ふなり園き書齋の屋根やうち橋きつ  
ふ洞が例よ落んとおろふおちよ今い場りかひ  
アレ工と怒と立てなご思ひぢぢぢぢぢぢぢぢぢ  
柵と竹とるおしゆあれ次のもるより少男をひの  
お繁か一オヤ〜具形さぬ〜アレサ具形さぬ大  
そろうあされ〜サせんぢさぬ〜ト呼び受され  
了野らあ〜ア、今のの夢ぢら〜ら〜ら〜白痴〜  
い膳や漬させやアグ〜ハ〜具形さぬお茶ぢい

れ〜まおりのま〜た

作者曰く兼而中五編と満尾と〜今全文の  
局と結むんとせ〜がまごさぬ〜の物語りを  
そま能ひぢよ〜中五編とお板〜結と拾  
選の巻と著せが相愛〜ぢは番願の松を新  
あ〜かん

落花 春風日記四編下終  
清潭



明治十五年二月廿四日御届

京橋區南鍋町一丁目一番地

山口縣平民

編輯人 松村春輔

同區彌左工門町十三番地

東京府平民

出版人 武田傳右工門

同區彌左工門町十三番地

淺草區三好町七番地

發賣人 大川錠吉

同區福井町五番地

同

發賣人 高梨彌三郎

深寄延房編集

浪華史略

一名難波戰記

五編近刻出版

波多野美一先生著

小學用文填字法全冊

霞峯片桐先生書

葛飾為齋畫

花鳥山水漫画早列

初編一冊 二編近刻

山々亭有人著

赤穂義士烈婦銘々傳 全二冊

孟齋芳虎画

彰義隊天野八郎遺稿

上野戰爭記

半紙本 全二冊

松村春輔編輯

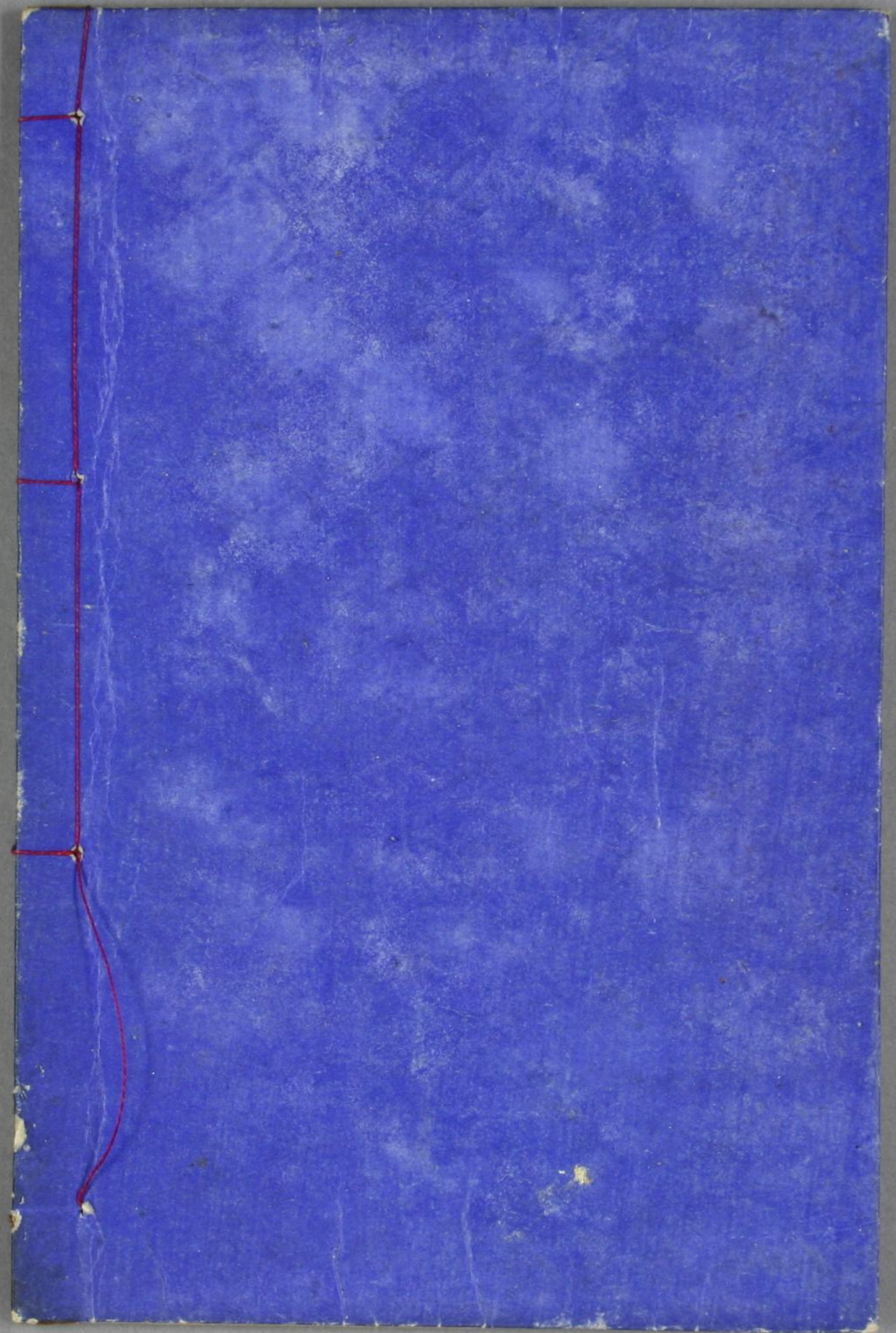
近世櫻田記聞 半紙本 全七冊

鮮齋永曜画

彌左工門町十三番地

東京書肆 文永堂 武田傳右衛門







松村春輔編輯

落花  
清潭

春風日記

四編

松齋吟光画

東京書肆

二書房發兌

